

機法一体章（四帖第十一通）

南無阿彌陀仏と申すは・いかなる心にて
なもあみだぶつ もう
 候や、しかればなにと彌陀をたのみて・
そうろう
 報土往生をばとぐべく候やらん、これを
ほうどおうじよう
 心得べきようは・まず、南無阿彌陀仏の
こころう
 六字のすがたを・よくよく心得わけて
ろくじ
 彌陀をばたのむべし、そもそも、南無
みだ
 阿彌陀仏の体は・すなわちわれら衆生の・
あみだぶつ たい
 後生たすけたまえとたのみもうす心なり、
ごしやう
 すなわちたのむ衆生を・阿彌陀如来の
しゆじやう
あみだにょらい

よくしろしめして・すでに無上大利の
功徳をあたえましますなり、これを、
衆生に回向したまえるといえるは・この心
なり、されば、弥陀をたのむ機を・阿弥陀
仏のたすけたまう法なるがゆえに、これを
機法一体の南無阿弥陀仏といえるは
このころなり、これすなわちわれらが
往生の定まりたる・他力の信心なりとは・
心得べきものなり、あなかしく、あなかしく

(不読) 明応六年五月二十五日これを書きおわる